巻 頭 言

ペルージャ

今年の早春，イタリアから一通の招待状を受け取った．ペルージャにおける夏の学校で８月初めから５週間，複素解析のコースを担当して欲しいというものであった．私は瞬時にこれは無理だと思った．なにしろ９月には北大で日本数学会秋季総合分科会を開催せねばならないし，その直前の週には特異点日仏シンポジウムが控えていたのだ．それに加えて，７月は既にフランスとイタリアに行く計画で一杯であった．私は暫く悩んだが，結局イタリアの友人の強い勧めとイタリアの魅力に抗し切れず，無謀にもこれを引き受けてしまった．「脱走兵」のレッテルを持って待ち構えている周囲の人達の顔が浮かびつつも…．さすがに７月の計画は全て変更した．７月３０日に学会プログラムの最終稿を数学会事務局に送付し，翌早朝イタリアへ発った．日本語のメールが読めるようにと持たされたパソコンをしっかり抱えて．

ペルージャはローマとフィレンツェの中間にあり，ウンブリア州の州都である．紀元前数百年からのエトルスコ文化時代，古代ローマなどの石造物が丘の上に累々と積み重なり，上下にも入り組んだ構造は複雑でエッシャーの世界に入り込んだような気分にもなる．街全体はとてつもなく古いのに，どの部分を見ても美しく，新しい感動を覚える．とある週末，私は突然衝動に駆られ，柄にもなく絵を描き始めていた．

ペルージャはサッカーの中田英寿がイタリアで最初に活躍した街でもある．中田といえば少し前まで日本代表チームのキャプテンとして出場し，試合後のインタビューではいつも「いつもながら決定力不足でした」と言っていたのを思い出す．どこの組織でも決定力のある人がいないと，徒にパス回しをしているだけだったり，シュートを打ってもゴールキーパー正面だったり，大きく枠を外してしまったりする．

この夏の学校は Scuola Matematica Interuniversitaria（SMI）という組織により開催される．SMI は３０年以上前から，学生および若手研究者の数学の基本的修得を目的に活動を行っており，毎年夏，ペルージャで学部学生と若い大学院生のための基本的コースを，近くのコルトナで上級者向のコースを開設している．ペルージャのコースには１００名程，コルトナのコースには６０名程が参加し，その内６〜７割はイタリアから，他はヨーロッパを中心に世界各地から集まり，学生の質は極めて高い．さらに興味のある方は，http://www.matapp.unimib.it/smi/ を参照されたい．

今年ペルージャでは、基礎的諸分野の１０コースが開かれ，私は前述のように複素解析（一変数複素関数論）を受け持った．学生は２コース取ることが義務付けられ，中間試験，期末試験があり，最終的評価が与えられる．１コースは月曜から金曜まで毎日１時間の講義と毎週２度の１時間半の演習からなり，かなりの労力を要求される．私のクラスには２０名程の学生がいた．丁度良い規模である．

教科書には迷わず H．カルタン（彼は今年１００歳になった）の本を選んだ．今回は Dover から出ている英訳を用いたが，私が学生時代，習いたてのフランス語で原著を読み，物理から数学に転向する契機を与えてくれた本である．複素解析を改めて勉強しなおしてみるととても楽しい．わずかの準備で決定的結果がつぎつぎに現れる．表情豊かなイタリアの学生はその都度全身で喜びを表してくれる．「先生はいつも顔で微笑んでいるだけでなく，目が微笑んでいる」，「先生の描く円は美しくて，まるでジォットのようだ」とお世辞も上手で，こちらも乗せられてしまう．鋭い質問も飛び交う．講義はクラス全体で作りあげてゆくものだと改めて感じた．学生との親睦食事会の後，皆で旧市街の広場に上っていった．そこではまだ信じられない位多くの人が夏の夜を楽しんでいた．我々も美味しいジェラートを食べながら夜更けまで語り合った．

複素解析はヨーロッパ伝統の産物である．その古さにもかかわらず常に新鮮な刺激を与えてくれる．今回無理を承知でこのコースを引き受けたのも，私の携わっているささやかな数学のルーツが全てそこにあると感じていたことにもよる．Viva Analisi Complessa !

（諏訪 立雄，北海道大学大学院理学研究科）

追記．私の我侭を許して下さったばかりでなく，本当に献身的に御協力下さった北大数学教室の素晴らしき方々にはこの場をお借りして心から感謝致します．お陰さまで日仏シンポジウム，秋季総合分科会共無事終了しました．日仏シンポジウムの開会式には在日フランス大使ベルナール ド・モンフェラン氏も御出席下さり，日仏の協力関係をより深めることが出来ました．また学会開催については，森田康夫理事長をはじめ数学会の方々にも大変お世話になりました．